

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成29年度農作物病虫害発生予察情報について

平成29年度農作物病虫害発生予報第14号を発表したので送付します。
平成29年度農作物病虫害発生予報第14号

平成30年3月2日
徳島県

I. 果樹
果樹共通

果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年よりやや早い
発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 勝浦町における昨年の予察灯誘殺数は、チャバネアオカメムシでは8月第3半旬より急増し(図1)、極早生温州ミカン等で被害が認められた。また、ツヤアオカメムシでは、9月第5半旬より急増し10月第2半旬には855頭と平年の4.7倍誘殺された(図2)。

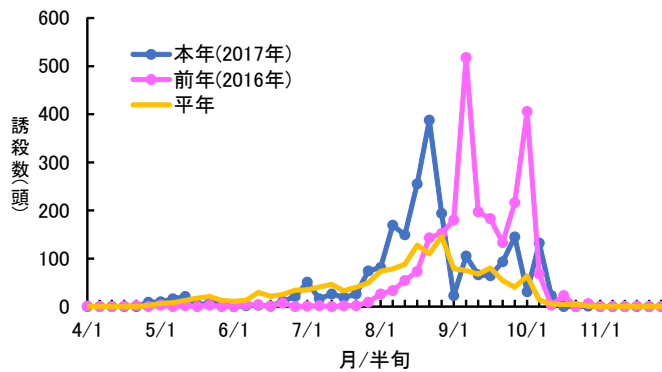


図1 予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺数推移(勝浦町)

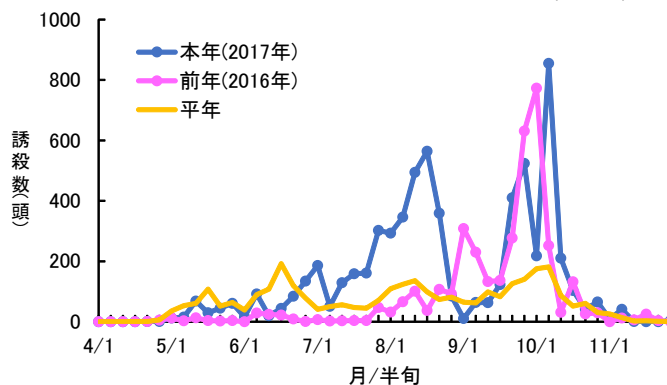


図2 予察灯によるツヤアオカメムシの誘殺数推移(勝浦町)

上板

町における予察灯誘殺数は、

チャバネアオカメムシでは、9月第3半旬には127頭と平年の12.7倍誘殺され(図3), 県北部のナシやカキで被害が認められた。また、ツヤアオカメムシでは、10月第1半旬には179頭と平年の6.2倍誘殺された(図4)。

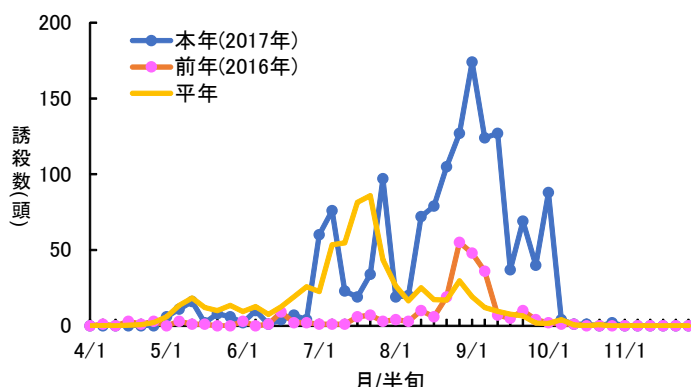


図3 予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺数推移(上板町)

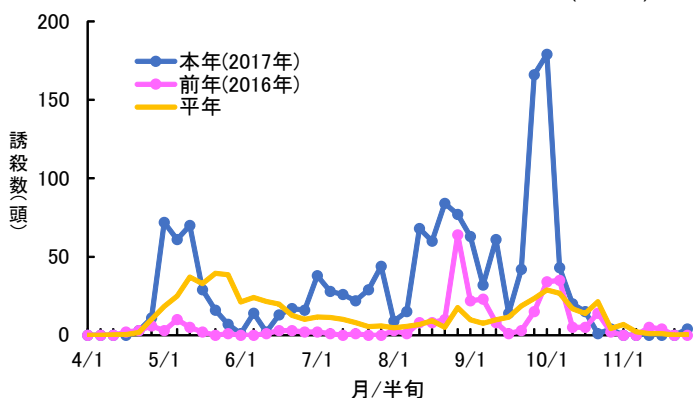


図4 予察灯によるツヤアオカメムシの誘殺数推移(上板町)

- (2) 2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2か所調査)では、8地点で越冬を確認、越冬成虫は0.9頭/m²であり、平年(1.5頭/m²)並で、前年(成虫確認地点数は6地点、越冬成虫数は2.5頭/m²)に比べて低い越冬密度であった。
- (3) 3月1日発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少なく、平年に比べて晴れの日が少ないと予想されており、発生助長的な気象条件である。

II. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が66.7%, 発病度が2.9と、平年(8.0%, 0.5)に比べて高い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。特に、下葉には丁寧に散布する。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、発病葉率が1.2%、発病果率が0.2%と、平年(6.5%、0.1%、0.0%)に比べて高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

(2) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が12.5%、発病度が2.1)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20～25℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

(2) 肥料切れは病勢の進展を助長するので、肥培管理に注意する。

(3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。

(4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が44.4%と平年(44.8%)並の発生であるが、寄生葉率は2.9%と平年(4.2%)に比べてやや低い。なお、種別割合は、オンシツコナジラミ及びタバココナジラミとも同程度である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているため、薬剤が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、発病果率が0.4%と、平年(1.7%、0.4%)に比べて高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が14.3%、発病葉率が0.1%と、平年(14.8%、0.5%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が57.1%、発病葉率が5.0%と、平年(60.7%、7.9%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃くらいで多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.1%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が28.6%と平年(38.3%)並の発生であるが、寄生葉率は1.6%と平年(6.1%)に比べてやや低い。なお、被害果実は認めていない(平年同時期は被害果率が1.6%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年より多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が42.9%と平年(22.6%)に比べてやや高いが、寄生葉率は1.7%と平年(1.2%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬

液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.1%, 寄生葉率が0.0%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%, 発病葉率が3.9%と、平年(74.6%, 10.2%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 罹病葉は圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3) 同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が11.1%, 発病果率が0.4%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

(5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年より少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が11.1%, 発病葉率が0.1%と、平年(54.8%, 12.5%)に比べて低い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。

(3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行う。

(4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

褐斑病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「中」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では, 発生圃場率が33.3%, 発病葉率が4.1%と, 平年(73.8%, 12.7%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には, 暖房機のファンを作動させて, ハウス内の多湿化を防止する。また, 灌水過多にならないように注意する。

(2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は, 葉の裏側を重点的に行う。

(3) 耐性菌出現の恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年より少ない), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が6.3%, 寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので, 初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので, 薬液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年より少ない), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が34.1%, 寄生葉率が4.0%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので, 初期防除に努める。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では, 発生圃場率が22.2%と平年(3.2%)に比べて高く, 寄生葉率が0.8%と平年(0.1%)に比べてやや高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので, 初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので, 薬液は葉裏にも十分に付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ハウレンソウ

べと病

1) 予報の内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が8.1%, 発病度が0.5)。

(2) 3月1日発表の1か月予報では, 気温は平年より高く, 降水量は平年並か多く, 日照時間は平年並か少なく, 平年に比べて晴れの日が少ないと予想されており, 発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 県内では, べと病菌レース13による発病が確認されているので, レース13以上に抵抗性を持つ品種を

- 利用する。作型等の関係で作付けできない場合には、薬剤による防除を徹底する。
- (2) 平均気温が8～18℃で曇雨天が続くと、多発しやすい。発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
 - (3) 葉が繁茂して軟弱となると被害が多いので、肥培管理に注意する。
 - (4) 病原菌は被害株に付着越冬し、春になると分生胞子を形成して伝染する。春先の発生を抑制するために、薬剤を予防的に散布する。
 - (5) 罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているため、速やかに処分する。

アブラムシ類

- 1) 予報内容
発生量 平年よりやや少なく(前年より少ない)、発生程度は「少」
- 2) 予報の根拠
 - (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が44.0%、1株当たり寄生虫数は0.7頭)。
 - (2) 3月1日発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少なく、平年に比べて晴れの日が少ないと予想されており、発生には中間的な気象条件である。
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているため、薬剤が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
 - (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

灰色かび病

- 1) 予報内容
発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」
- 2) 予報の根拠
 - (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が10.0%、発病果率が0.6%)。
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。
 - (2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。
 - (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

- 1) 予報内容
発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」
- 2) 予報の根拠
 - (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.6%、発病葉率が0.1%、発病果率が0.4%)。
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
 - (2) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。
 - (3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
 - (4) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

- 1) 予報内容
発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」
- 2) 予報の根拠
 - (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が14.3%、寄生株率が0.9%と、平年(25.7%、3.1%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が64.3%、寄生葉率が18.0%と、平年(65.7%, 10.0%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

III. その他

1. 施設栽培において暖房機の最低気温の設定値を下げ過ぎると、低温性病害の発生を著しく助長する恐れがあるので、注意する。
2. 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないよう注意する。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所
URL : <http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/t-boujoshou/>

- 病害虫の発生予察情報、発生状況、防除法等をお知らせしています。